出題された問題に対する評価

評価者:第 104 回国試に出題された 500 問の全問について、国試として適切な問題であったか否か、本委員会の委員に評価していただいた。

評価方法:資料 3 に示すように、個々の問題について適切か否かを 5 段階で評価していただき、「不適切」とした問題については、その理由を「難問(専門医レベル)」、「設問あるいは選択肢に問題がある」、「複数の正解」、「正解なし」、「画像・写真に問題がある」、「その他」の中から選んでいただいた。さらに「その他」が理由の場合には、その内容を具体的に記入していただいた。

回収状況:金沢医科大学、福島県立医科大学、埼玉医科大学、東京医科大学、大阪医科大学、徳島大学、山口大学、宮崎大学の 8 大学から回答をいただいた。

集計結果:上記 8 大学からの回答をまとめた結果は以下のとおりである。

１．全 500 問に対する評価

全体として模範的良問と評価された問題は 5.9%、良問とされたのが 24.1%、普通とされたのが 56.5%、少し不適切とされたのが 8.3%、不適切とされたのが 3.8%であった(図 20)。問題の種類別にみると、良問とされた問題の比率が最も高かったのは A 問題(各論)、不適切とされた問題の比率が最も高かったのが D 問題(各論)であった。第 100 回から第 103 回までの過去の国試問題の評価と比較したのが図 24 である。年度により評価大学が若干異なるので厳密には言えないが、全問で比べると第 104 回国試では「不適切」と評価された問題は 12.0%で、昨年を上回り、過去最多であった。特に、必修問題で「不適切」と評価された問題が多かった。「不適切」とされた理由で最も多かったのが「設問あるいは選択肢に問題がある」で、「難問(専門医レベル)」が次に多かった。この傾向は昨年も同様であった。「不適切」とした理由で、「その他」に分類したものについては表 8 に、そのまま記載した。

2.採点除外等の取り扱いとした問題等について

第 104 回国試では採点からの除外あるいは複数正解など、特別な取り扱いとされた問題が 19 問あり、過去最多であった。問題の種類別にみると、必修問題が 8 問、総論が 4 問、各論が 7 問であった。この 19 問についての評価をまとめたのが図 21 である。模範的良問との回答が複数みられた問題はなかった。良問との回答が複数みられた問題、A56、C29、E69、F05、F21、F25、H11、I11 であった。今年は、500 題の出題中 19 問(3.8%)が、事後評価で特別な取り扱いが行われることとなった。国家試験にふさわしい良問の作成がいかに難しいかを示しているものと思われる。

3.模範的良問よび不適切との回答があった問題について

模範的良問との回答があった問題の一覧を図 22 に示す。模範的良問との回答が 1 つ以上あった問題は 500 問中 172 問(34.4%)、模範的良問との回答が複数あったのは 49 問(9.8%)であり、両者とも昨年より減った。模範的良問との回答が最も少なかったのは C 問題および F 問題で、両者とも必修問題であった。

不適切との回答があった問題の一覧を図 23 に示す。不適切との回答が 1 つ以上あった問題は 500 問中 121 問(24.2%)、不適切との回答が複数あったのは 27 問(5.4%)で、両者とも昨年より減った。不適切との回答が複数あった問題の多かったのは D 問題と I 問題でともに各論であった。厚生労働省から「複数の正解とされた問題」、「採点除外等の取り扱いとした問題」として公表された問題 19 問のうち不適切との回答がよせられた問題は 13 問であった。

まとめ:第 104 回の国試では、出題された 500 問のうち「良問」と評価された問題が 33.0%、「良

問」と「普通」とを合わせると 86.5%、「不適切」と評価されたのは 12.0%であった。図 24 に示すように、昨年までは「良問」と評価された問題の割合が増加傾向にあったが、今年は各論、総論、必修のすべてで「良問」と評価された問題が減少し、「不適切」と評価された問題が各論と必修で増加した。特に、必修問題については「不適切」との評価が 13.3%に達し、今までの調査の中で最も高い数字であった。